◆孤独から愛へ◆ Touch

作：ライル・ケスラー Lyle Kessler
翻訳：小田島恒志

上演台本・演出：浅野佳成

ハロルド……柳瀬太一

トリート……佐野準
/ 蒲原智城

フィリップ…佐藤勇太
/ 石岡和総

作曲・音楽制作：八幡茂

舞台美術：水野統夫

照明：坂野貢也

音響：上田舞子

舞台監督：佐田剛久

あらすじ

父も母も知らず、寒さや病気、空腹から守ってくれる人を持たない孤児のトリートとフィリップの兄弟は、ふたりきりで暮らし、兄は弟を親代わりとなって養っている。

ふたりの生活を守りつづけるために、兄は窃盗（せっとう）や恐喝（きょうかつ）で生計を立て、弟には外出したり本や新聞を読んで文字を勉強することを禁じている。

ある日、トリートは酒場で知り合った初老の紳士ハロルドを誘拐して身代金をせしめようと、泥酔（でいすい）させて、家に連れ込む。しかし誘拐は失敗する。孤児院で親の愛にあこがれて育ったハロルドは、トリートとフィリップを「デッドエンド・キッド」と呼び、兄弟の家でふたりの暮らしに入り込み、料理をし、着るもの、履くものを与え、疑似家庭（ぎじかてい）を作り始める。

「元気づけてあげよう」と言いながら肩を抱いてくれるハロルドに、フィリップは初めて手と手が触れ合うことのぬくもりや安らぎを知り、触れられる（Touch）ことによって、身をゆだねて心を開いていく。そしてハロルドに導かれて、兄から禁じられていた外の世界を発見する。

しかしトリートは、それまでふたりきりで身を寄せ合って生きてきて、自分に頼りきりだったフィリップが自分から離れていくのを感じ、これまで作り上げてきた兄弟の家庭を危うくするため、ハロルドの「愛情」に身をゆだねることができず、肩を抱かれることを拒（こば）む。

ハロルドは、辛抱（しんぼう）強くトリートをしつけ、教育する。頑（かたく）なだったトリートも少しずつハロルドに心を開き始めるのだった。

『Touch ～孤独から愛へ』に寄せて── ライル・ケスラー氏からのメッセージ

私の戯曲に対する劇団風の絶えざる研究に心から感謝しています。昨年7月に風の『Touch ～孤独から愛へ』の公演を見るために、東京へ招待していただくという幸運を得ました。風の劇場でこの作品は、すばらしい俳優たちの情熱と、演出家の明晰な洞察によって、まったく予期しなかった光をあてられました。いつかまた、この並外れた芸術家たちのグループによって演じられるという幸運を得た私の作品だけでなく、ほかの作家の作品も含めて観劇するために、妻と私は再び日本を訪れたいと願っています。

2002年4月11日

ライル・ケスラー

April 11,2002

I do appreciate the Kaze Theatre's dedication and continual reinvestigation of my play.

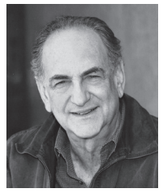
I was fortunate enough to be invited to Tokyo to see an earlier production.The passion of the wonderful actors and the clarity of vision of the director revealed the play in totally unexpected ways.

My wife and I hope to someday return to Japan to view future productions of not only my play. but other playwright's work who are fortunate enough to be produced by this extradinary group of artists.

Lyle Kessler

愛と孤独 希望と絶望
あきらめと決意
生きることの証しを
つかみとろうとする
魂の孤児たち

■ 作者プロフィール ■



ライル・ケスラー　Lyle Kessler

フィラデルフィア出身。『酒場』という作品で作家デビュー。次作『所有』をオフブロードウェイのアンサンブルシアターで上演。『バーニング・ブライト』では、ロックフェラー財団の奨励金とニューヨーク州芸術協議会金賞を受賞。

夫人であるマーガレット・ラッド氏とともにニューヨーク、ロスアンジェルスを中心に、30年にわたってイマジネーション・ワークショップを行っている。イマジネーション・ワークショップとは、演劇の持つ創造性を使って、リスクを負っている子どもたち、精神治療を必要とする患者たち、ホームレスの人たちなどと交流をはかり、閉ざされた心を開いていく活動で、近年アメリカでは、社会的にも教育的にも、大きな価値があることが立証されている。

東京演劇集団風
Tokyo Theatre Company KAZE

1987年に劇団創立。この名前には、風のように、形にとらわれずものをつくるという思いが込められています。

1988年に旗揚公演として『アナ・クリスティ』（作：ユージン・オニール）を上演。以後、近代・現代戯曲や新作翻訳劇の上演に意欲的に取り組んでいます。

また同年、『ハムレット』で初の地域巡演を行いました。高校生・中学生を中心にした全国巡演活動は現在、年間170ステージほど行われ、代表的なレパートリー『星の王子さま』（作：サン＝テグジュペリ）、『ヘレン・ケラー ～ひびき合うものたち』（作:松兼功）、『Touch ～孤独から愛へ』（作:ライル・ケスラー）、『肝っ玉おっ母とその子供たち』（作：ベルトルト・ブレヒト）などがロングランを続けています。

1999年には東京・東中野に創造活動の拠点となる専用劇場〈レパートリーシアター KAZE〉を建設。再演を重ね繰り返し上演することで、観客とともに質の高い舞台を育てていく“レパートリー・システム”をとり、年間7～10本の作品を上演しています。

2003年からは“外に開かれた窓”として〈ビエンナーレKAZE国際演劇祭〉を開催。2012年に5度目を数えたこの演劇祭は、海外の優れた作品を招聘するのみならず、高い志を持った演劇人との交流を育んできました。ミラン・スラデク マイム劇場（ドイツ）、ウジェーヌ・イヨネスコ劇場（モルドバ）、マントゥール劇場（フランス）、俳優オリビエ・コント（フランス）、作家マテイ・ヴィスニュック（ルーマニア出身・フランス在住）ら海外の演劇人との交流を通じて、『ハムレット』『ジャンヌ・ダルク』（ウジェーヌ・イヨネスコ劇場との共同製作）、『三文オペラ』（ミラン・スラデク演出）など、劇団の財産となる新しいレパートリーも生まれています。

こうした演劇を通じた国際交流が評価されるにおよび、海外での招待公演も増えてきました。劇団代表 辻由美子がルーマニアで開かれた一人芝居の世界大会〈第2回ガラ・スター国際演劇祭〉でグランプリを受賞（ブライアン・マキャベラ作『ピカソの女たち～オルガ』）したのはその代表的な活動です。

「この時代、この社会において演劇の為すべきことは何であるか」という問いを、舞台と客席との出会いのなかに投げかけながら、私たち東京演劇集団風は、未だ形を採らない豊かさを求めて── 観客に対して自在に、そして舞台に対して意欲的に取り組んでいきます。

東京演劇集団風 〒164-0003 東京都中野区東中野1-2-4
Tel.03-3363-3261[代] Fax.03-3363-3265
…E-mail:info@kaze-net.org URL:http://www.kaze-net.org/